

深い学びに関する考察（訂正版）

1 「深い学び」とは

- 「習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう」こと（中教審答申 H28. 12. 21）
- 『知識・技能』が関連付いて構造化されたり身体化されたりして高度化し、駆動する状態に向かうこと」（田村学『深い学び』東洋館出版社2018, p. 64）
- 「ディープ・アクティブラーニング（以下「DAL」）とは学生が他者と変わりながら、対象世界を深く学び、これまでの知識や経験と結びつけると同時にこれからの人生につなげていけるような学習。（中略）『深さ』の系譜として少なくとも『深い学習』『深い理解』『深い関与』をあげることができる。（中略）DALとは、外的活動における能動性だけではなく内的活動における能動性も重視した学習」（松下佳代『ディープ・アクティブラーニング』勁草書房2015, pp23-24）
- 「学習への深いアプローチのなかには従来の伝統的講義でも引き出せる活動からしっかりとデザインされた戦略性の高いアクティブラーニング型授業でないと十分に引き出せない活動までさまざまに並んでいる」（溝上慎一「アクティブラーニング論から見たディープ・アクティブラーニング」同書pp. 47-48）

2 資質・能力の三つの柱（三観点）と深い学び（田村, 前掲書, pp. 37-64 を加工）

- ①知識・技能（何を理解しているか、何ができるか）
相互につながり合った知識や技能となる ⇒ 知識の概念化、身体化、自動化
- ②思考力・判断力・表現力等（理解していること・できることをどう使うか）
場所や状況とつながった知識・技能となる ⇒ 知識の構造化、高度化、駆動化
- ③学びに向かう力・人間性（主体的に学習に取り組む態度、どう社会・世界と関わりよりよい人生を送るか）
目的や価値、手応えとつながり、構造化して高度化した知識となる ⇒ 持続化、安定化、適正化

3 深い学びを実現するための6つの視点

- ①意味学習：ドリルや暗記等の機械的学習ではなく学習者の既有知識や（誤）概念と関連付けられた学習
 - ②問いの構造化：重大な観念に関わる本質的な問いに繋がる拡散・焦点化・深化などの発問と質問の構造化
 - ③逆向き設計：①成果の同定、②成果の証拠の同定、③学習・指導計画の立案の順序で行うカリキュラム設計
 - ④知識・理解の構造化：帰納・演繹的な知識の概念化や連続しパターン化した知識の繋がりとその転移
 - ⑤技法・ツール：協同学習の技法（例：ジグソー法）や思考の技法やツール（例：ウェビングマップ）活用
 - ⑥学びのモード：教科の見方・考え方による習得・活用・探究、内化・外化・振り返り、真性学習、メタ認知
- （文責：教頭）



